

小学校から中学校にかけて英語の授業に対する 情意がどのように変化するか

——テキストマイニングによる分析——

カレイラ松崎順子・齊藤涼子・執行智子

要 旨

本研究では国分寺市内の小学校3校と中学校2校の小学5年生260名、小学6年生289名、中学1年生250名の合計799名に、英語に対する気持ち（英語の授業で好きなこと・嫌いなこと・やる気が出る時・やる気が出ない時）がどのように変化するかを調べるために、自由記述式の質問紙調査を行った。その結果、手をあげたり、先生に指名されたりして英語を話すことを嫌がる生徒が小学6年生や中学1年生になると増えてくるが、本研究に参加した生徒の多くは小学校から中学校にかけて継続して英語で話すことを楽しんでおり、特に、小学5年生はゲームを好み、小学6年生になるとグループ活動を、中学1年生になるとペアワークを楽しんでいることが明らかになった。

はじめに

2020年度から小学校に英語が教科として導入されるが、現在大きな課題の一つとしてあげられているのが英語教育における小・中学校の連携である（直山，2011；萬谷・志村・中村・宮下，2013）。小・中学生両者に関連した研究（岡崎・西田，2013；カレイラ・齊藤，2016；萬谷他，2013）は今までいくつか行われており、たとえば、萬谷他（2013）は中学校の英語の教員に対して小学校で外国語活動を行ってきた生徒をどのように受け止めているかの意識調査を行い、中学校教員の多くが、外国語活動を行ってきた生徒は「聞く・話す」などのコミュニケーション能力の素地は身につけているが、「書く・読む」の領域では理解が進んでいないと感じていることを報告している。また、コミュニケーションに積極的に取り組んでいるという成果を認めているが、正確さに対する態度が弱いと考えている傾向を捉え、「生徒達の積極性を伸張させつつ、いかに accuracy を高めてゆくかという工夫と努力に専門性を発揮してゆくことが必要になってくる」（萬谷他，2013，p.145）と指摘している。また、岡崎・西田（2013）は中学1年生を対象に小学校での外国語活動に対する認識を調査し

小学校から中学校にかけて英語の授業に対する情意がどのように変化するか

た結果、多くの生徒は2年間の外国語活動に対して概ね満足しており、特に、ゲームや場面設定された会話を楽しんでいたが、英語を聞いて理解することが難しかったと感じており、中学校の英語の授業では「書くこと」「単語を覚える」ことが難しいと感じていることを明らかにしている。さらに、カレイラ・齊藤（2016）は中学1年生に小学校の外国語活動と中学校の英語の授業において「よかったこと」と「大変だったこと」に関して自由に記述してもらい、それらをテキストマイニングにより分析した結果、小学校のときはゲームや先生が楽しかったと感じていたが、中学1年生になるとビンゴや歌や読むこと・書くことに変化したと報告している。また、中学校では話す・聞く・読むに関しては大変であると感じている生徒は少なく、この点では小・中学校の連携はある程度出来ているのではないかと指摘している。その他、小・中学生両者に直接質問紙調査を行っている研究として宋・水野・侯・濤岡・加藤（2019）があげられる。宗他は札幌市の小・中学生に子どもたちの「学び」に関する実態調査を行い、「外国語・英語が好き」という項目に対してどの学年も50%以上が当てはまると回答していたと報告している。

このように英語教育における小・中学生両者に関する研究の多くは中学生に行い、中学生になってから小学校のときの外国語活動を振り返ってもらう研究が多く、小・中学生の両者に直接調査を行った研究は少ない。特に、英語の授業に対する情意の変化を調べるために、小・中学生両者に行われた500名以上を超えるような規模の自由記述式の回答による調査は著者らが知る限り日本では行われていない。自由記述式の回答は表現に自由度があるために、量的なデータよりも豊かなデータを得ることができ、生き生きとした説明が自分の言葉で語られるため、予測していなかった問題を見いだすことができる（Dörnyei, 2003）。よって、本研究では小学校から中学校にかけて英語の授業に対する情意がどのように変化していくかを明らかにするために、小学5年生、小学6年生、および中学1年生のそれぞれに自由記述式の質問紙調査を行うことにした。

本研究

本研究の目的

小学5年生、小学6年生、および中学1年生が英語の授業に対する気持ち（英語の授業で好きなこと・嫌いなこと・やる気が出る時・やる気が出ない時）がどのように変化するかを明らかにすることを本研究の目的とする。

分析方法

本研究では自由記述式の質的なデータをText Mining Studio 5.1を使用してテキストマイニングの分析を行い、量的なデータに変換した。テキストマイニングは「形態素解析とい

う、単語の活用を考慮しつつ最小の意味単位に分割する段階（分かち書き）と、形態素から大きなクロス表に書かれた数字を処理する段階（解析）の2段階のメカニズムからなっている」（費・三宅, 2014, p.22）。Text Mining Studio 5.1は頻度分析をはじめテキストに付随する属性を活かした様々な分析ができ、その結果をグラフィカルに表現することができる。本研究では単語や係り受けの出現回数をカウントする単語頻度解析と係り受け頻度解析を行い、さらに、同時出現（共起）の確率を用い、関連の強いもの同士がクラスタを作成することばネットワーク分析により学年別の全体的な概要をつかんだ。ことばネットワーク分析では、丸（ノード）の大きさは係り受け関係が抽出された単語の出現頻度を表しており、ノードが大きいほどその単語が多く出現していることを表している。また、ノード間の線の太さは共起関係の信頼度¹⁾に対応しており（NTT データ数理システム, 2014）、信頼度が高いほど線の太さは太くなる。

また、出現頻度が多くなく上位に現れていない重要な単語や係り受けを見落とす可能性があるため、補完類似度を用いて小学5年生、小学6年生、および中学1年生のそれぞれの特徴語と特徴表現も抽出した。

質問紙

質問項目は以下の4つの自由記述式の項目である。

1. 英語の授業で楽しいことは何ですか。それはなぜですか。
2. 英語の授業で嫌なことは何ですか。それはなぜですか。
3. 英語の授業でどういう時にやる気が出ますか。それはなぜですか。
4. 英語の授業でどういう時にやる気が出ませんか。それはなぜですか。

参加者

調査を行ったのは国分寺市内の公立の小学校3校と中学校2校の小学5年生260名、小学6年生289名、中学1年生250名の合計799名であり、質問紙調査を2016年2月から3月にかけて行った。

今回調査を行った国分寺市では教育委員会の方針のもと、小学校の外国語活動の時間は外国語補助教員 Assistant Language Teacher（以下 ALT とする）と担任教員とのチーム・ティーチングで行われており、ALT は英語の母語話者であり、市教育委員会が契約している外国人講師派遣会社から派遣されている。各学校に派遣された ALT は小学5・6年生のすべてのクラスの外国語活動の授業に入り、ALT 主導の授業を行っている。担任教員はクラスの掌握、ALT と生徒とのやりとりのサポート、生徒の振り返りのチェックなどを主に行っている。授業では、ゲームをペアやグループワークで行い、基本的な英語の表現の学習、ALT の国の紹介、日本の年中行事や文化の説明や紹介などを写真や絵を使いながら

小学校から中学校にかけて英語の授業に対する情意がどのように変化するか

英語で行っている。

中学校にも ALT は派遣されているが、時間数は小学校よりは少なく、中学 1 年生の英語の時間数の年間 140 時間のうち、15～20 時間ぐらいである。中学校は英語の専科教員がそれぞれの年間計画に基づき授業を進めている。ALT とのチーム・ティーチングでは、英語を話す力や聞く力を高め、コミュニケーション活動を多く行うことに焦点をあてた授業を展開している。チーム・ティーチングのときはすべて英語で授業を行うが、通常の授業での英語の使用の割合は、教員によって異なる。

結果

「英語の授業で楽しいこと」の分析結果

全体の分析

図 1 と図 2 は「英語の授業で楽しいこと」の小学 5・6 年生および中学 1 年生の単語頻度解析と係り受け頻度解析の結果である。「ゲーム」「ゲーム—学ぶ+できる」「ゲーム—やる」が上位に抽出されており、本研究に参加した児童全体がゲームを楽しんでいたことがわかる。また、「話す」「英語—話す+できる」「友達—話す」も上位に抽出されており、本研究に参加した多くの生徒は友達と英語を話すことを楽しいと感じていたと思われる。

図 3 は「英語の授業で楽しかったこと」のこばネットワーク分析の結果である。小学 5 年生のクラスには「しんけいすいじゃく」「ハローソング」「シール」「もらう+できる」

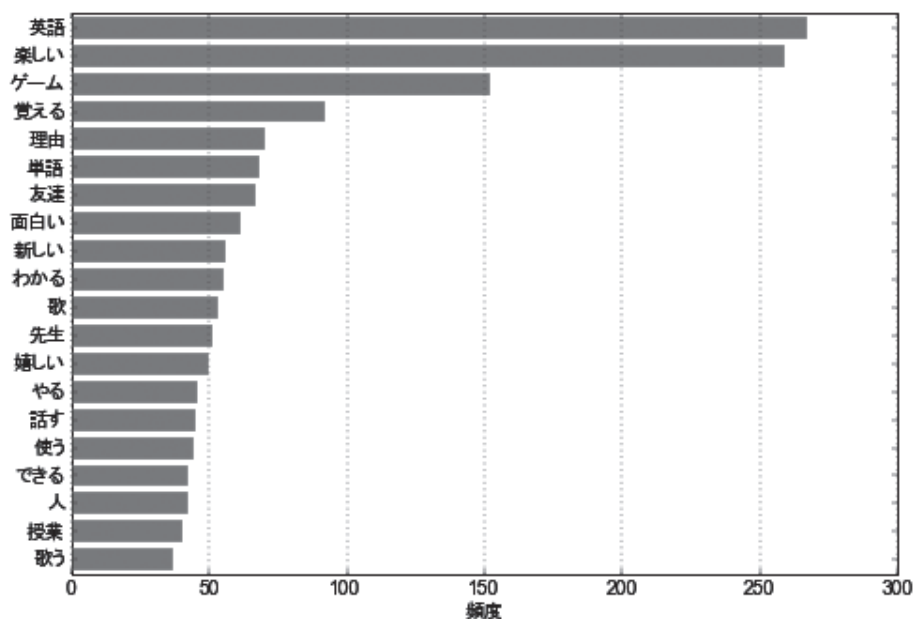


図 1 「英語の授業で楽しいこと」の全体の単語頻度解析の結果

小学校から中学校にかけて英語の授業に対する情意がどのように変化するか

年生はラインゲーム、劇、インタビューを、中学1年生は文法やペアワークやプリントを楽しんでいることがわかる。

各学年の分析

図4と図5は小学5年生の「英語の授業で楽しいこと」の特徴語と特徴表現である。「ゲーム」「ゲーム—楽しい」「ゲーム—楽しむ」が特徴語と特徴表現として抽出されており、小学5年生は他の学年の生徒よりもゲームを楽しんでいるのがわかる。

図6と図7は「英語の授業で楽しいこと」の小学6年生の特徴語と特徴表現である。「友達」や「グループ」が特徴語として、また、「わかる」「英語—わかる」「好き—わかる」が特徴語と特徴表現として、その他「英語—話す」「いろいろ—話す+できる」が特徴表現として抽出されている。これらのことから、小学6年生になるとグループで英語を学ぶことや英語がわかるようになること、さらに、英語を話すことを楽しいと感じるようになる傾向があるといえる。

図8と図9は中学1年生の「英語の授業で楽しいこと」の特徴語と特徴表現である。「歌」「歌う」「歌—歌う」「話す+できる」「英語—話す+できる」「BINGO」「クイズ」が特徴語と特徴表現として抽出されており、中学1年生は歌うこと、英語を話すこと、BINGOやクイズを楽しんでいることがわかる。その他、「ペア」「ペア—やる」「ペア—できる」「ペア—

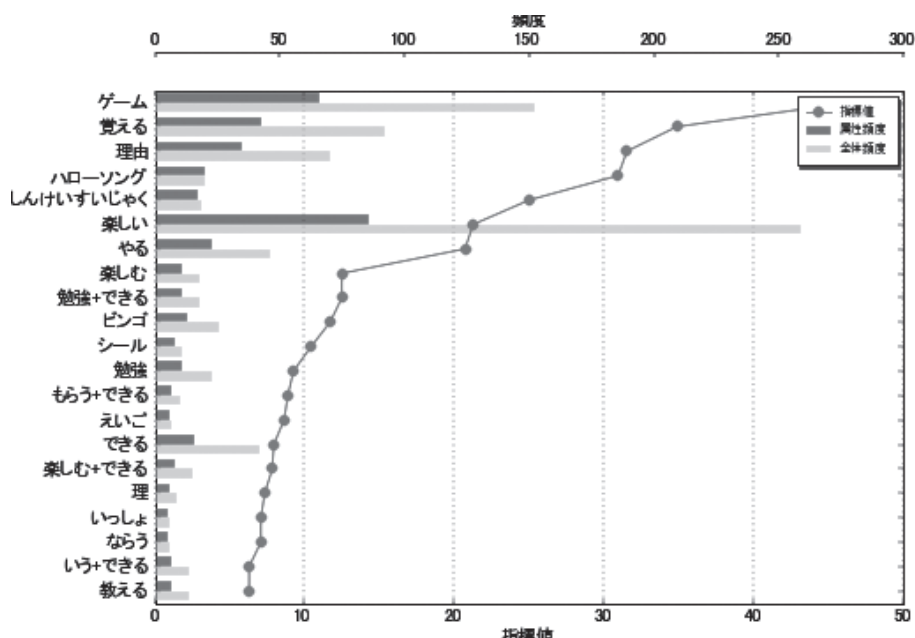


図4 小学5年生の「英語の授業で楽しいこと」の特徴語分析の結果

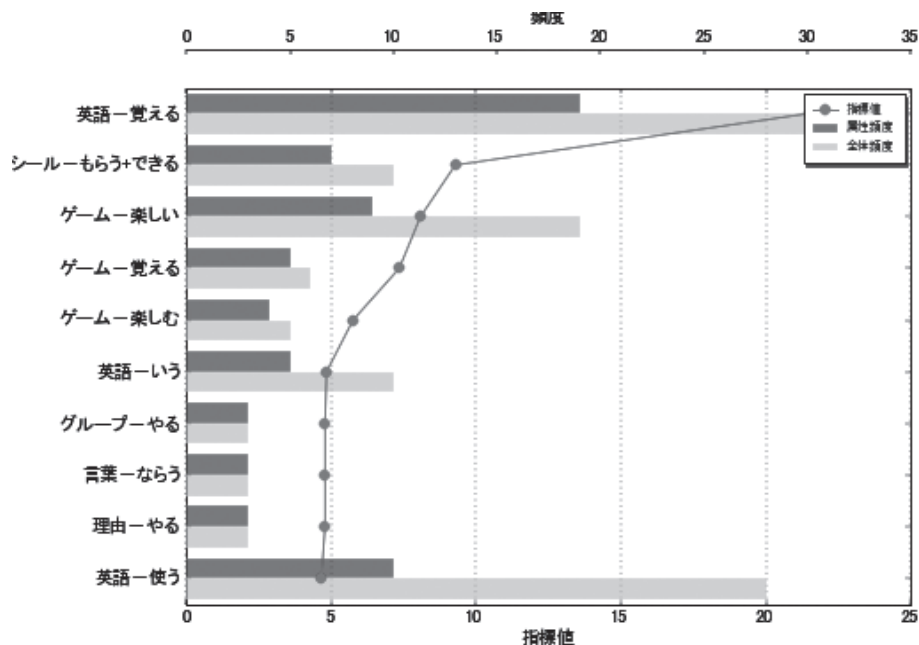


図5 小学5年生の「英語の授業で楽しいこと」の特徴表現分析の結果

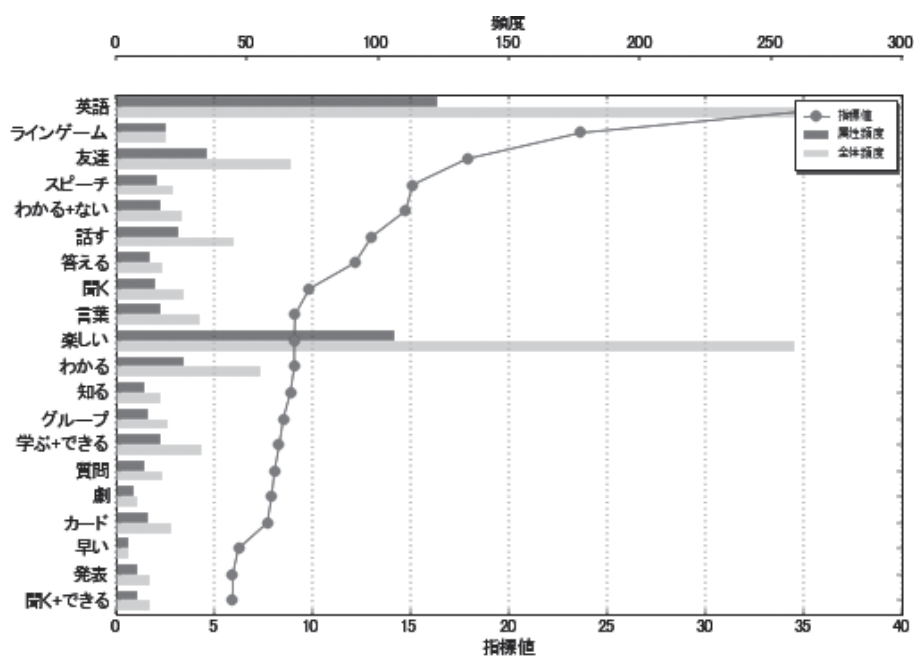


図6 小学6年生の「英語の授業で楽しいこと」の特徴語分析の結果

小学校から中学校にかけて英語の授業に対する情意がどのように変化するか

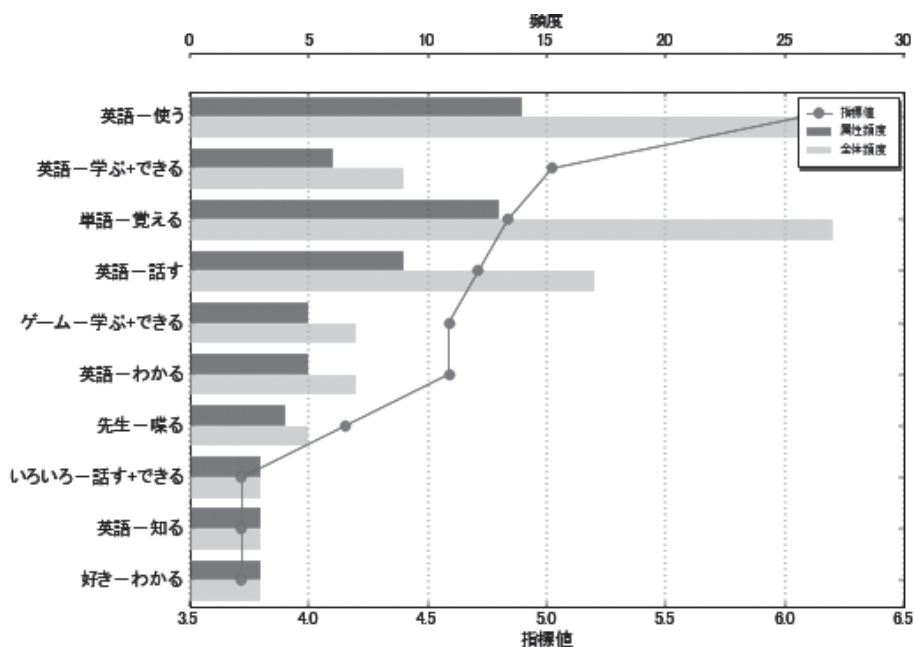


図7 小学6年生の「英語の授業で楽しいこと」の特徴表現分析の結果

練習」も抽出されており、ペアで行うことが楽しいと感じている生徒が増えてくることがわかる。

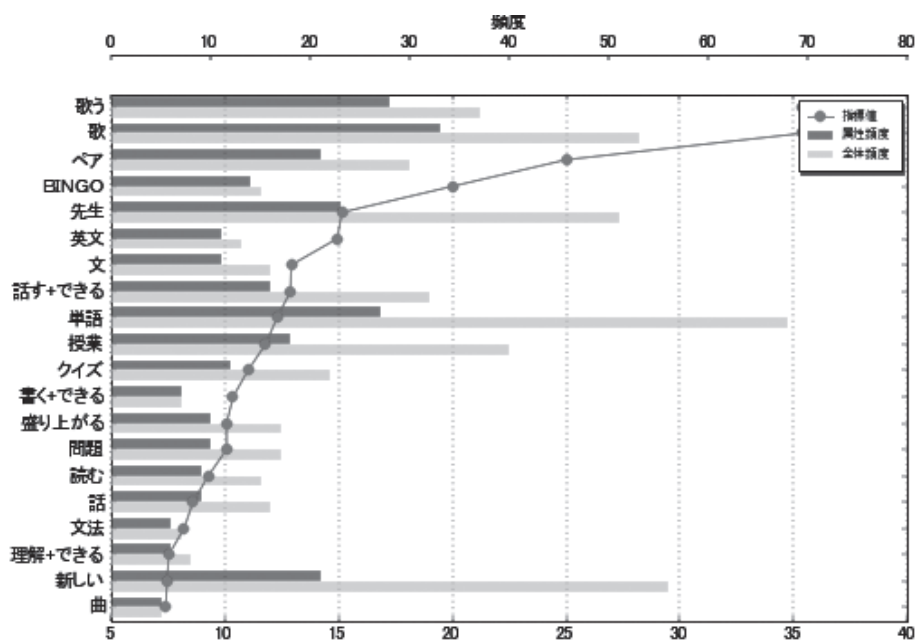


図8 中学1年生の「英語の授業で楽しいこと」の特徴語分析の結果

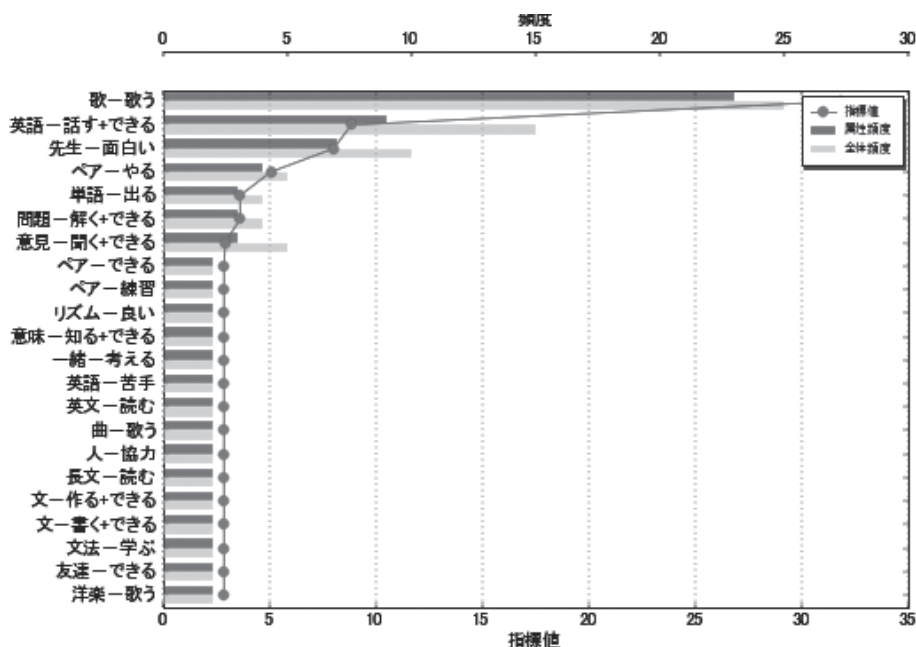


図9 中学1年生の「英語の授業で楽しいこと」の特徴表現分析の結果

「英語の授業で嫌なこと」の分析結果

全体の分析

図10と図11は「英語の授業で嫌なこと」の小学5・6年生および中学1年生全体の単語頻度解析と係り受け頻度解析の結果である。「無い」が上位に抽出されており、本研究に参加した生徒の多くが「英語の授業で嫌なこと」がないことがわかる。一方で、「わかる+ない」「英語—わかる+ない」「意味—わかる+ない」「発音—わかる+ない」も上位に抽出されており、本研究に参加した生徒の多くが英語がわからない、意味や発音がわからないことを嫌だと感じていると思われる。その他、「英語—話す」「英語—いう」「英語—発表」「英語—喋る+できない」「手—上げる」「人前—出る」「先生—あてる」「問題—あてる」など人前で英語を話したり、先生に当てられて英語を話したりすることが嫌だと思っている生徒が多い。

図12は「英語の授業で嫌なこと」のこばネットワーク分析の結果である。図12から小学5年生はあまり嫌いなことがなく、小学6年生は「ローマ字」「劇」「きんちょう」が嫌いなことであり、中学1年生になると「教科書」「単語」「単語テスト」「スペル」「小テスト」「リスニング」「当てる」「教科書」「答える」「順番」など様々なことを嫌いになるのがわかる。

小学校から中学校にかけて英語の授業に対する情意がどのように変化するか

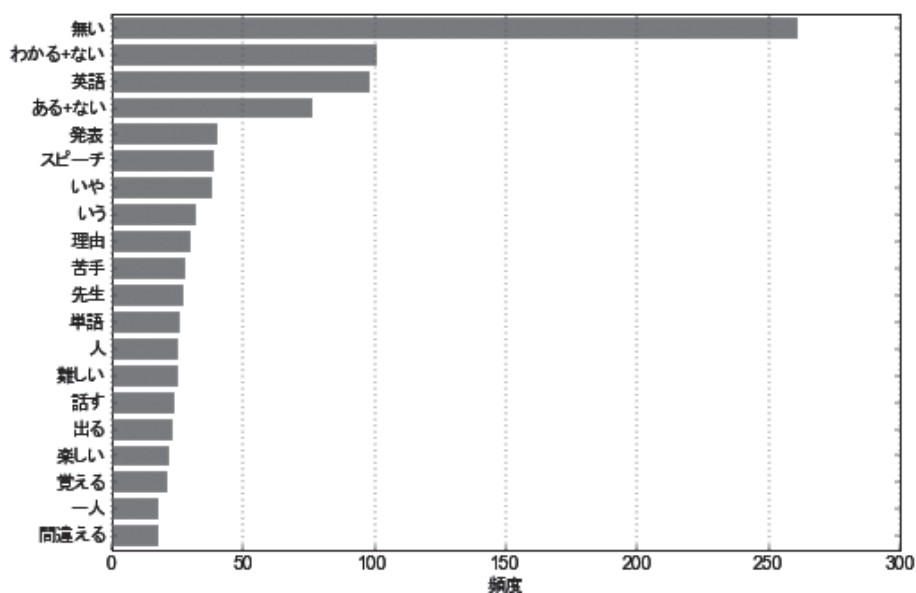


図 10 「英語の授業で嫌いなこと」の全体の単語頻度解析の結果

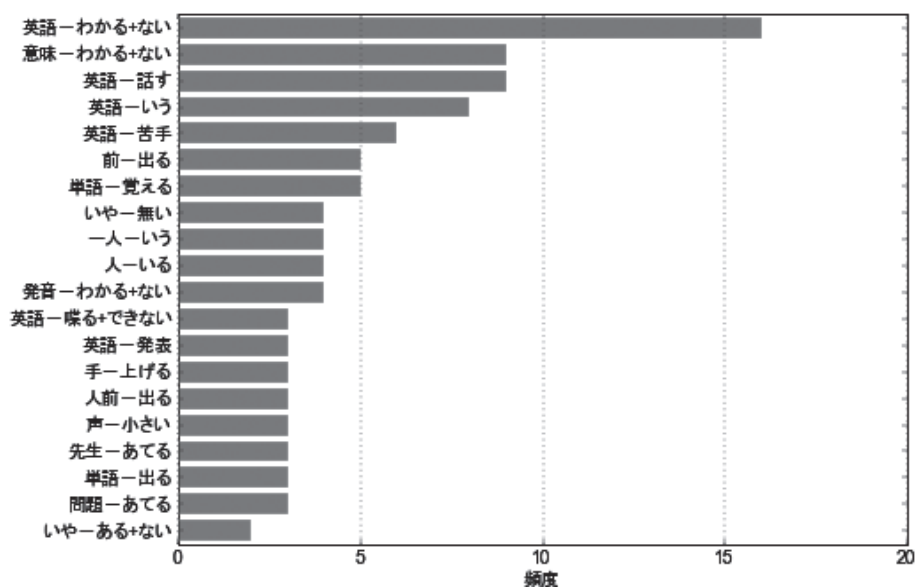


図 11 「英語の授業で嫌いなこと」の全体の係り受け頻度解析の結果

各学年の分析

図 13 と図 14 は小学 5 年生の「英語の授業で嫌いなこと」の特徴語と特徴表現である。図 13 では「無い」「ある + ない」が上位に抽出されていることから、小学 5 年生は英語の授業

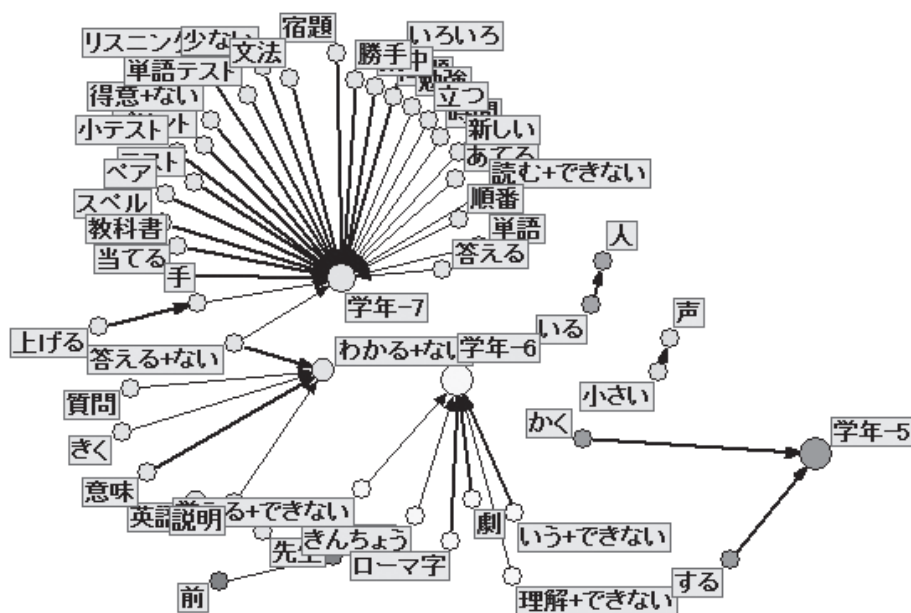


図12 「英語の授業で嫌なこと」のこばのネットワーク分析の結果

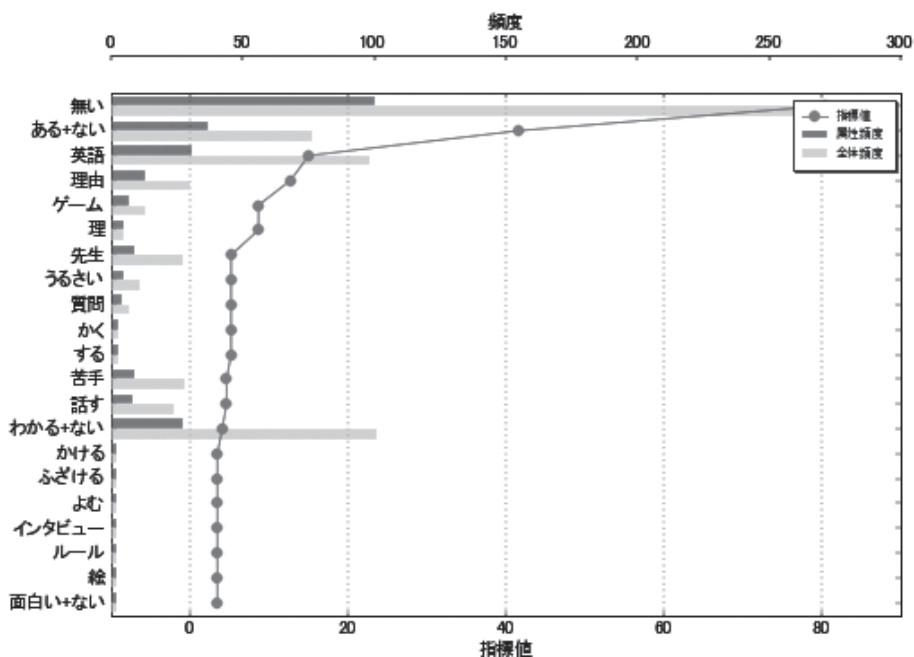


図13 小学5年生の「英語の授業で嫌なこと」の特徴語分析の結果

小学校から中学校にかけて英語の授業に対する情意がどのように変化するか

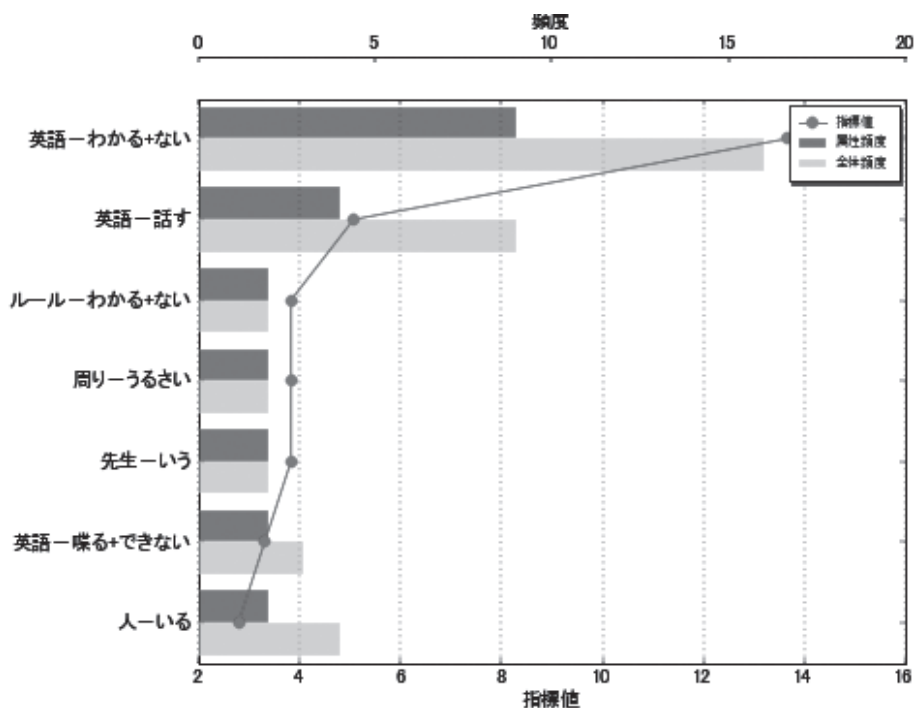


図 14 小学 5 年生の「英語の授業で嫌いなこと」の特徴表現分析の結果

で嫌いなことがあまりないといえる。特徴表現では「英語—わかる+ない」が上位に抽出されている。

図 15 と図 16 は小学 6 年生の「英語の授業で嫌いなこと」の特徴語と特徴表現である。「スピーチ」「いう」「発表」「一人」「きんちょう」「英語—いう」「一人—いう」「前—出る」「英語—発表」「発表—多い」が抽出されており、小学 6 年生になると人前で英語で発表することを嫌がる傾向があるといえる。また、「発音—わかる+ない」「英語—書く+できない」「理解+できない」「英語—苦手」が特徴表現として抽出されており、小学 6 年生になるとわからないことやできないことを嫌だと思う生徒が増えてくるのがわかる。

図 17 と図 18 は中学 1 年生の「英語の授業で嫌いなこと」の特徴語と特徴表現である。「単語」「単語—覚える」が上位に抽出されていることから、中学 1 年生になると単語を覚えるのを嫌だと思う生徒が増えてくる。また、特徴語では「問題」「当てる」「当たる」が、特徴表現では「先生—当てる」「問題—当たる」が抽出されていることから、中学 1 年生になると先生に当てられるのを嫌だと思う生徒が多くなるのがわかる。

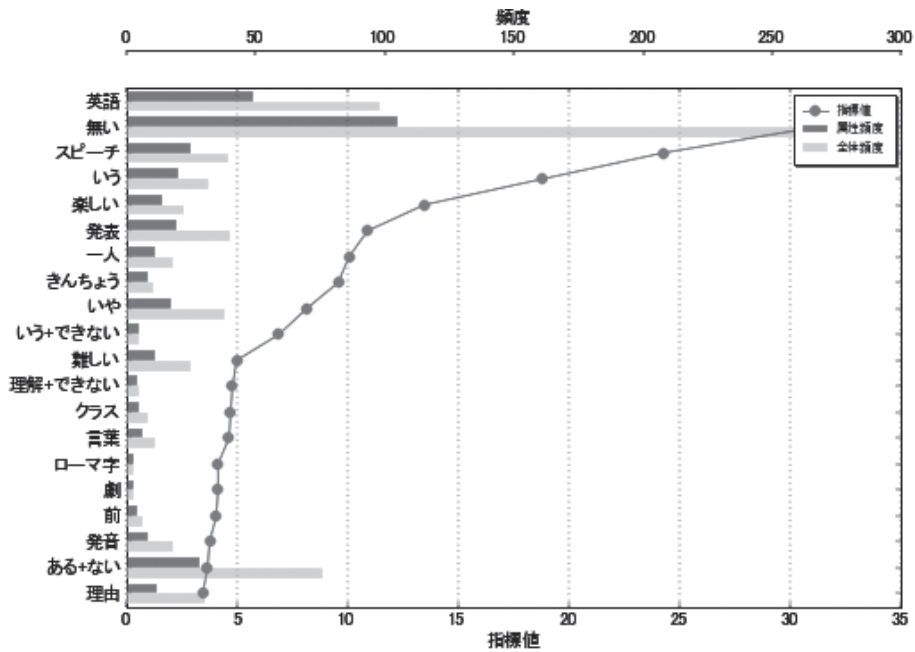


図15 小学6年生の「英語の授業で嫌なこと」の特徴語分析の結果

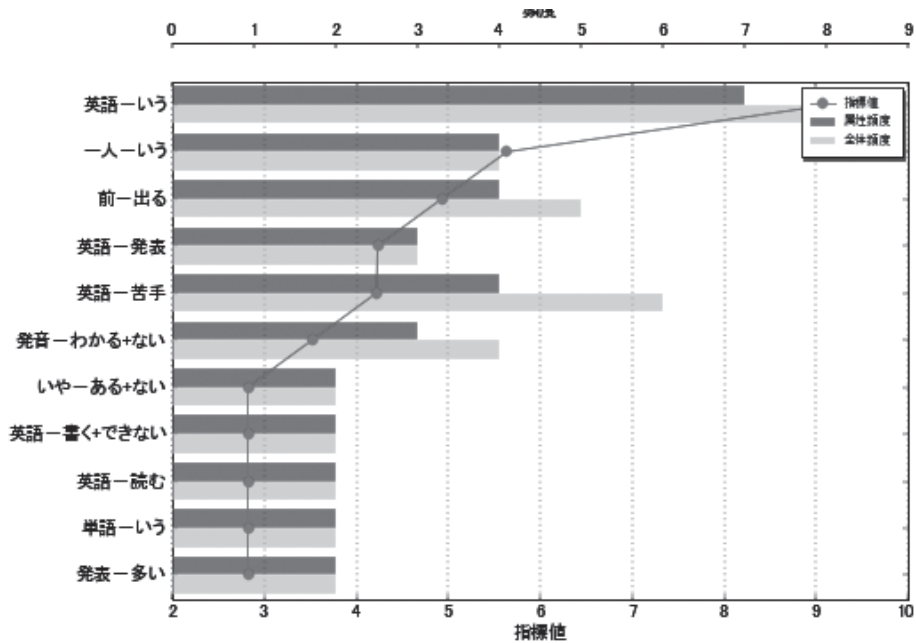


図16 小学6年生の「英語の授業で嫌なこと」の特徴表現分析の結果

小学校から中学校にかけて英語の授業に対する情意がどのように変化するか

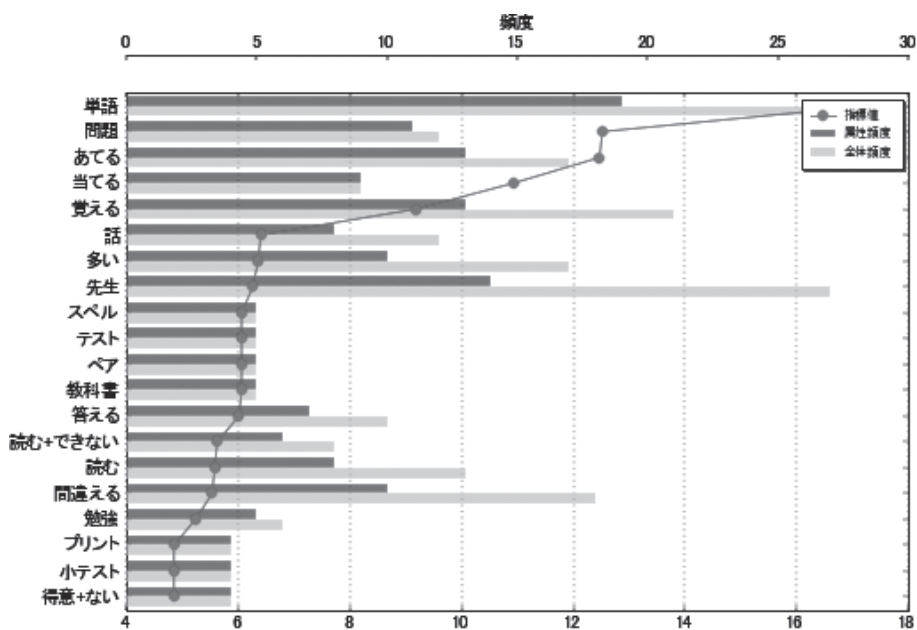


図 17 中学 1 年生の「英語の授業で嫌なこと」の特徴語分析の結果

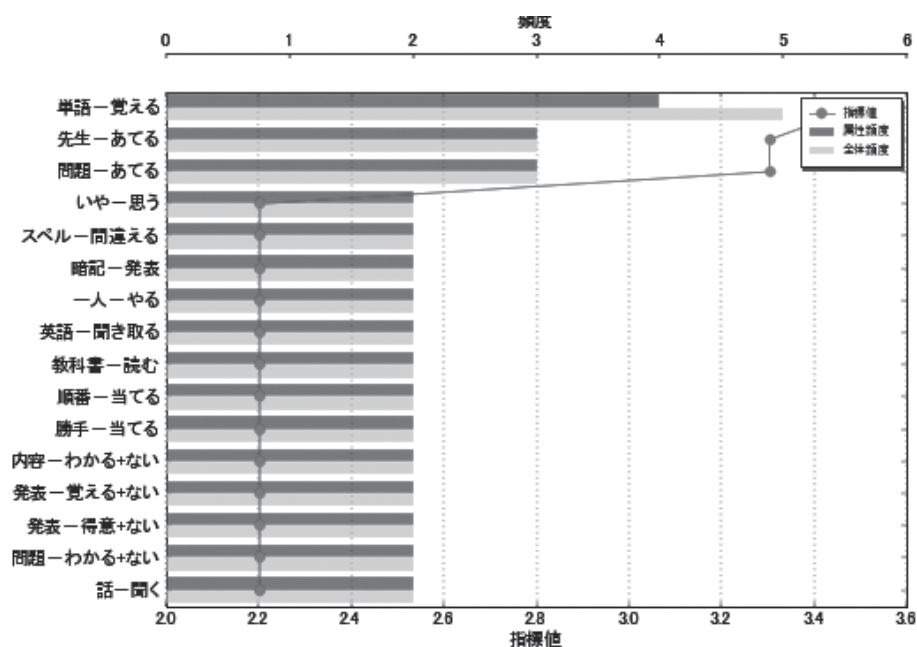


図 18 中学 1 年生の「英語の授業で嫌なこと」の特徴表現分析の結果

「英語の授業でやる気が出るとき」の分析結果

全体の分析

図19と図20は「英語の授業でやる気が出るとき」の小学5・6年生および中学1年生の単語頻度解析と係り受け頻度解析の結果である。「楽しい」「ゲーム」「先生」「シール—もらう+できる」「先生—ほめる」「単語—覚える」「ゲーム—やる」「英語—覚える」「歌—歌う」「自信—つく」が上位に抽出されており、これらの結果から楽しかったり、ゲームを行ったり、先生にほめられたり、単語を覚えられたり、シールをもらえたりしたときにやる気が出ることがわかる。

図21は「英語の授業でやる気が出るとき」のこばネットワーク分析の結果である。小学5年生のクラスには「楽しむ」「しんけいすいじゃく」が抽出されており、楽しいことや神経衰弱などがやる気につながっていることがわかる。小学6年生のクラスには「スピーチ」「聞く」「喋る」「ラインゲーム」「劇」があることから、聞くことや話すこと、その他、劇やラインゲームがやる気につながっており、中学1年生のクラスには「成績」「テスト」「文法」「小テスト」「問題」が抽出されており、テストや成績が彼らのやる気につながっていると思われる。

各学年の分析

図22と図23は小学5年生の「英語の授業でやる気が出るとき」の特徴語と特徴表現であ

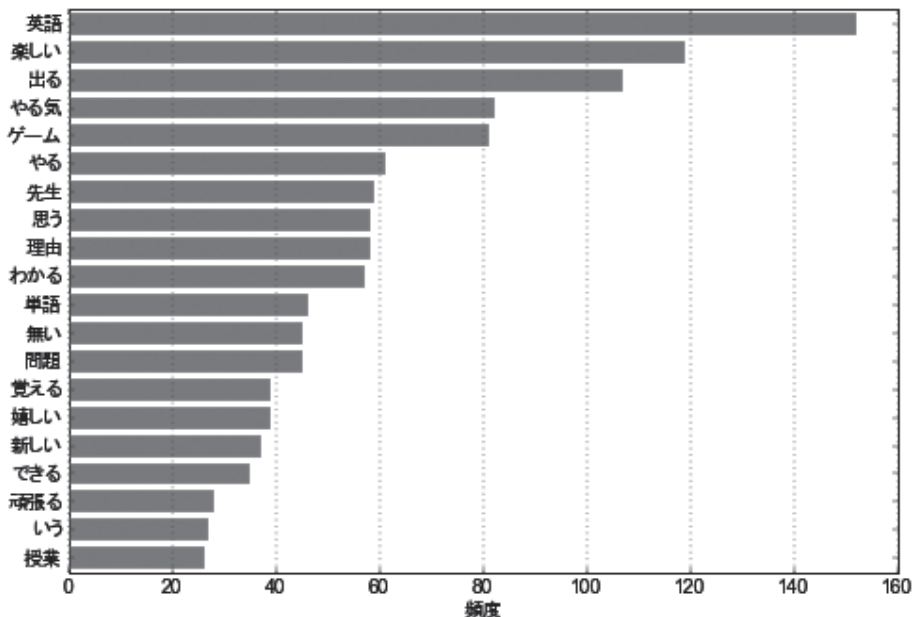


図19 「英語の授業でやる気が出るとき」の単語頻度解析の結果

小学校から中学校にかけて英語の授業に対する情意がどのように変化するか

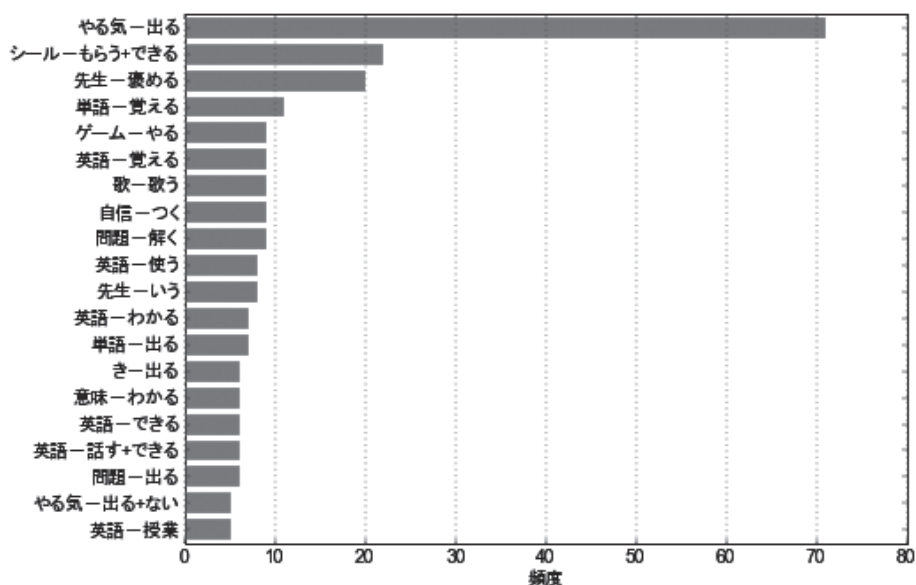


図 20 「英語の授業でやる気が出るとき」の係り受け頻度解析の結果

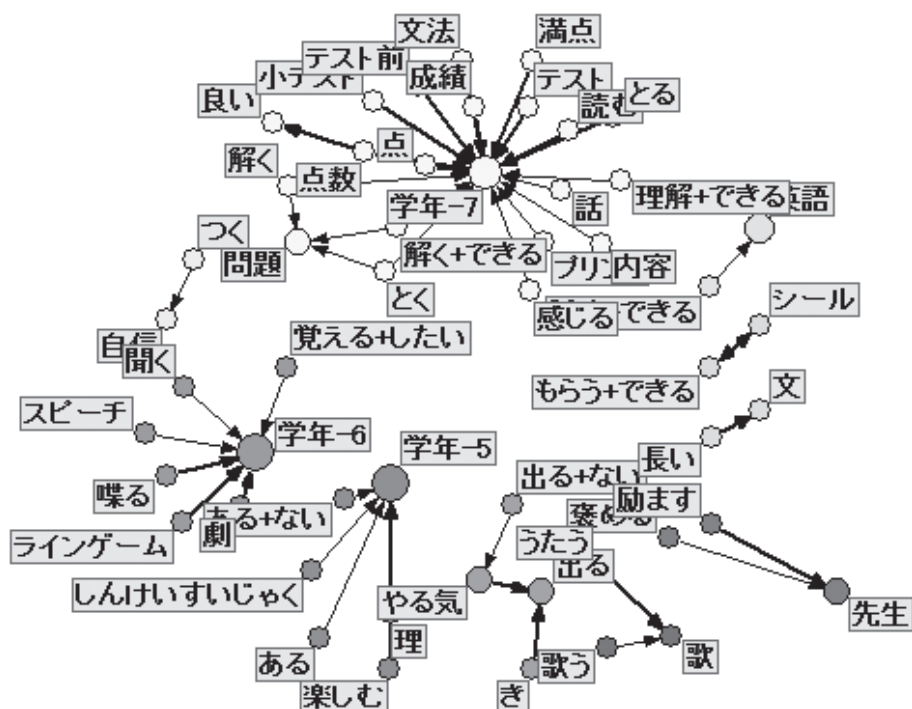


図 21 「英語の授業でやる気が出るとき」のこばネットワーク分析の結果

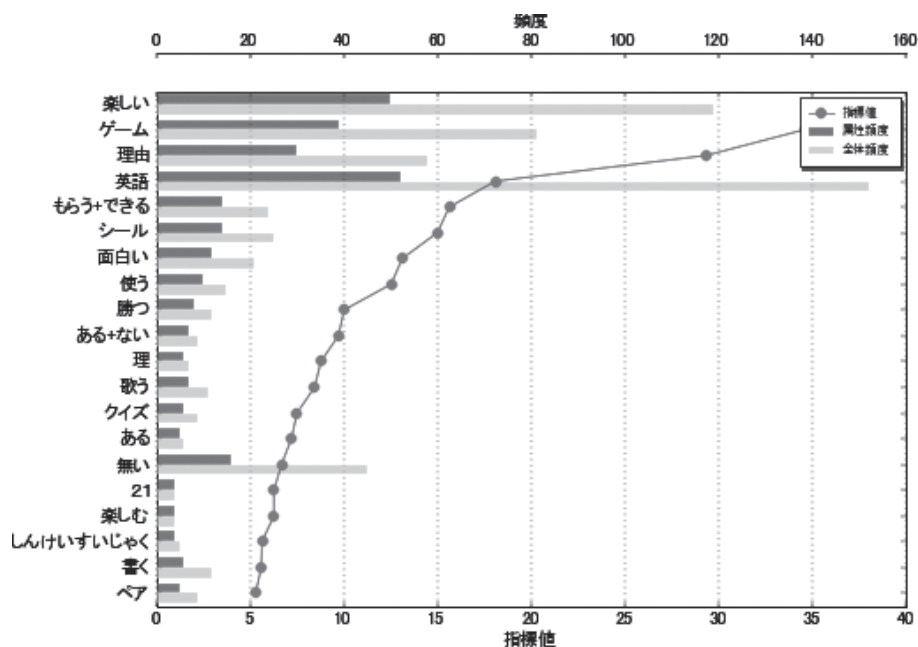


図22 小学5年生の「英語の授業でやる気が出るとき」の特徴語分析の結果

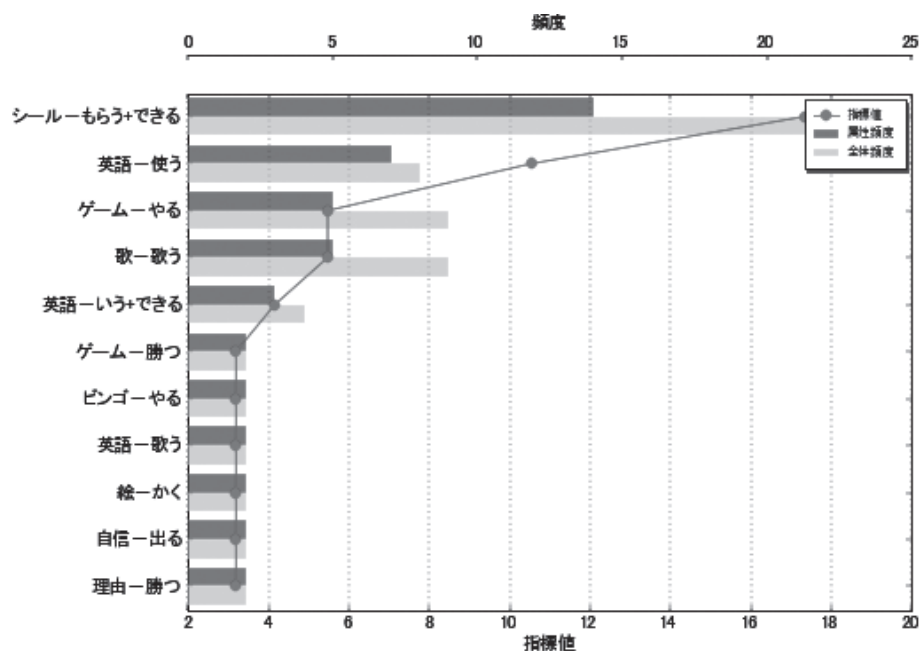


図23 小学5年生の「英語の授業でやる気が出るとき」の特徴表現分析の結果

小学校から中学校にかけて英語の授業に対する情意がどのように変化するか

る。「楽しい」「ゲーム」「英語」「シール」「勝つ」「歌う」「クイズ」が特徴語として、「シールもらう・できる」「英語一使う」「ゲームーやる」「英語ーいう＋できる」「ゲームー勝つ」「ビンゴーやる」が特徴表現として抽出されており、小学5年生はゲームに勝って、シールをもらうことにより、やる気が出る生徒が他の学年よりも多いといえる。

図24と図25は「英語の授業でやる気が出るとき」の小学6年生の特徴語と特徴表現である。「スピーチ」「先生」「聞く」「知る」「覚える」「劇」「自信」「グループ」が特徴語として、「先生ーいう」「英語ー覚える」「自信ーつく」「英語ー喋る」「英語ー聞く」「単語ー知る」「グループー発表」が特徴表現として抽出されており、小学6年生になると劇を行ったり、スピーチを行ったり、グループで発表を行ったりするときにやる気が出る生徒が増えてくる。

図26と図27は中学1年生の「英語の授業でやる気が出るとき」の特徴語と特徴表現である。「問題」「テスト」「わかる」「良い」「小テスト」「読む」「文」「解く」「達成感」が特徴語として、「問題ー解く＋できる」「問題ー解く」「テストー良い」「文ー読む」「テストー出る」「内容ーわかる」「文ー読む＋できる」「満点ーとる＋したい」が特徴表現として抽出されている。これらのことから、中学1年生になると問題が解けたとき、テストで良い点数が取れたとき、英文が読めたときなどに達成感を感じ、やる気が出てくる生徒が多くなるといえる。

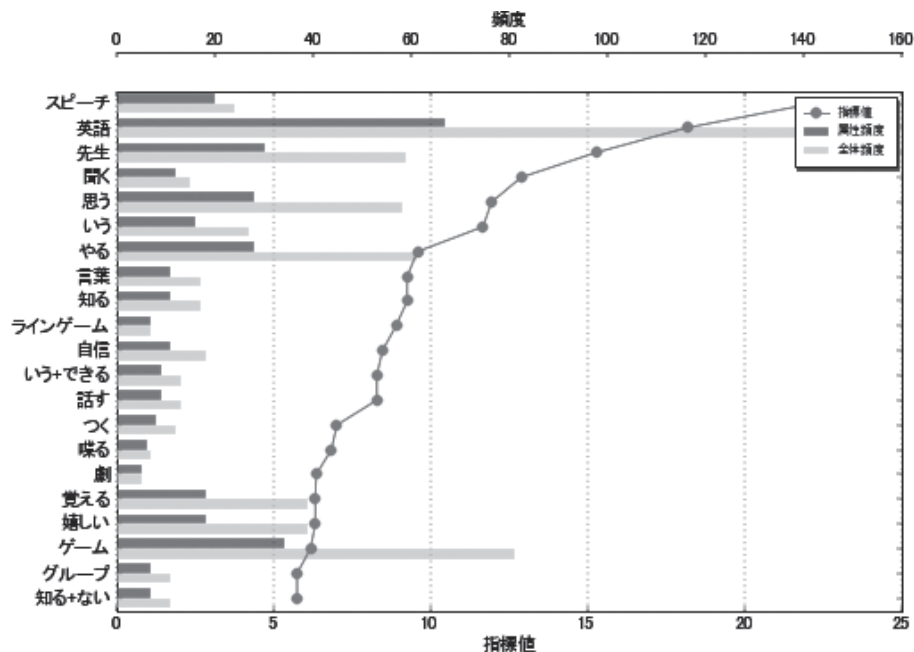


図24 小学6年生の「英語の授業でやる気が出るとき」の特徴語分析の結果

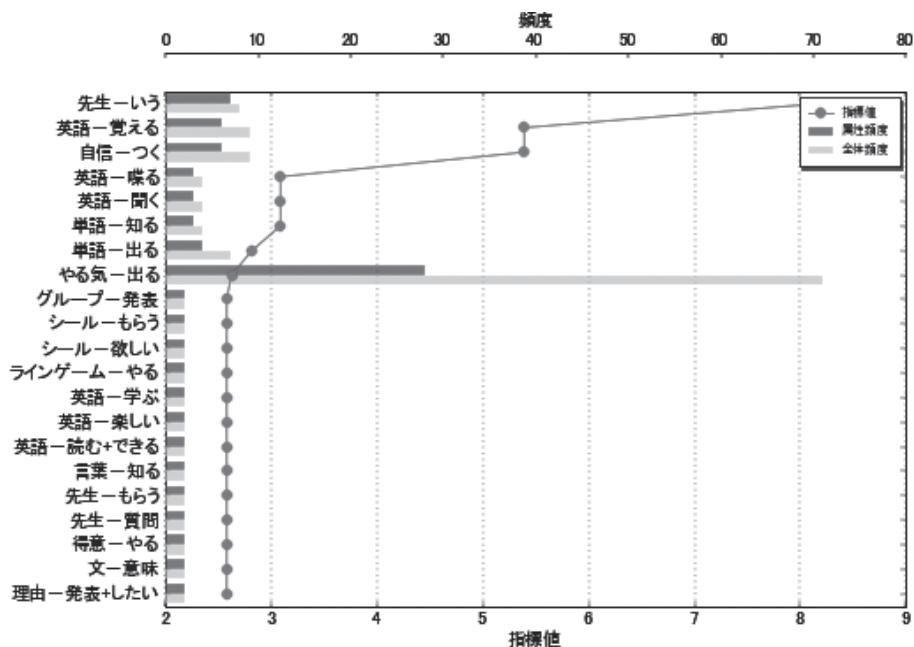


図25 小学6年生の「英語の授業でやる気が出るとき」の特徴表現分析の結果

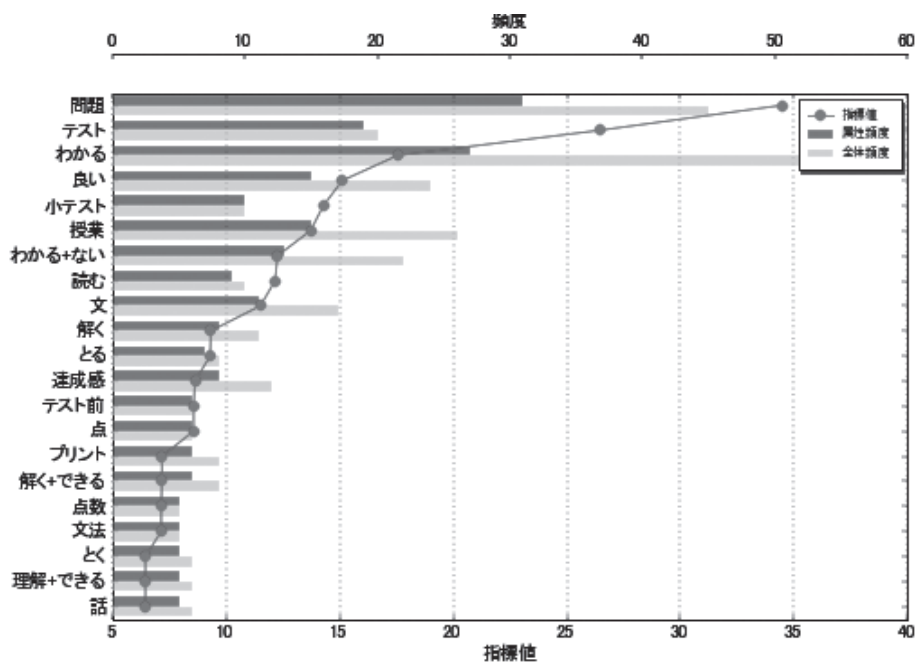


図26 中学1年生の「英語の授業でやる気が出るとき」の特徴語分析の結果

小学校から中学校にかけて英語の授業に対する情意がどのように変化するか

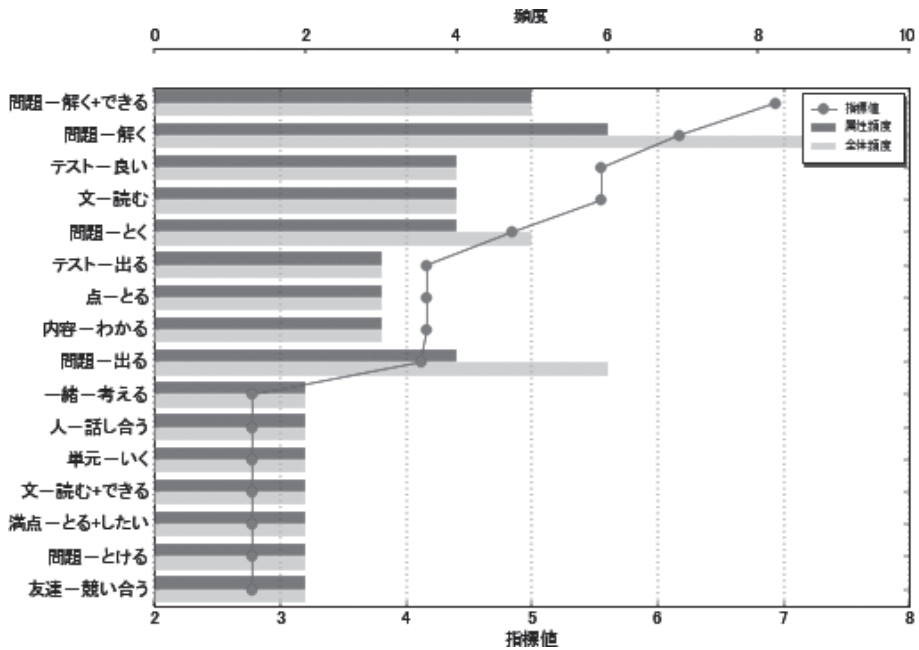


図 27 中学 1 年生の「英語の授業でやる気が出るとき」の特徴表現分析の結果

「英語の授業でやる気が出ないとき」の分析結果

全体の分析

図 28 と図 29 は「英語の授業でやる気が出ないとき」の小学 5・6 年生および中学 1 年生の単語頻度解析と係り受け頻度解析の結果である。「英語の授業でやる気が出ないとき」として「無い」が上位に抽出されており、本研究に参加した多くの生徒が「英語の授業でやる気が出ないとき」がないということがわかる。一方で、「先生」「スピーチ」「難しい」「眠い」「苦手」「単語」「問題」「発表」「英語—わかる+ない」「意味—わかる+ない」「意味—理解+できない」「英語—理解+できない」「問題—間違える」も上位に抽出されており、やる気が出ないときは、難しいとか苦手であると感じるときや、英語や意味がわからないときなどにやる気が出なくなる生徒が多いといえる。

図 30 は「英語の授業でやる気が出ないとき」のこばネットワーク分析の結果である。小学 5 年生のクラスタには「繰り返す」があることから、小学 5 年生は繰り返す行うことによりやる気なくなる生徒が多いことが推測できる。小学 6 年生のクラスタには「きんちょう」「前」「わかる+ない」「意味」が抽出されており、小学 6 年生になると人前で話したり、緊張したり、また、意味がわからないときにやる気が出なくなる生徒が増えてくることがわかる。また、中学 1 年生のクラスタに抽出された語句を見てみると、「小テスト」「テスト」「理解+できない」「緊張」「授業」が抽出されており、中学 1 年生になると授業が理解できないことやテストに関することがやる気が出なくなる原因になっていると思われる。

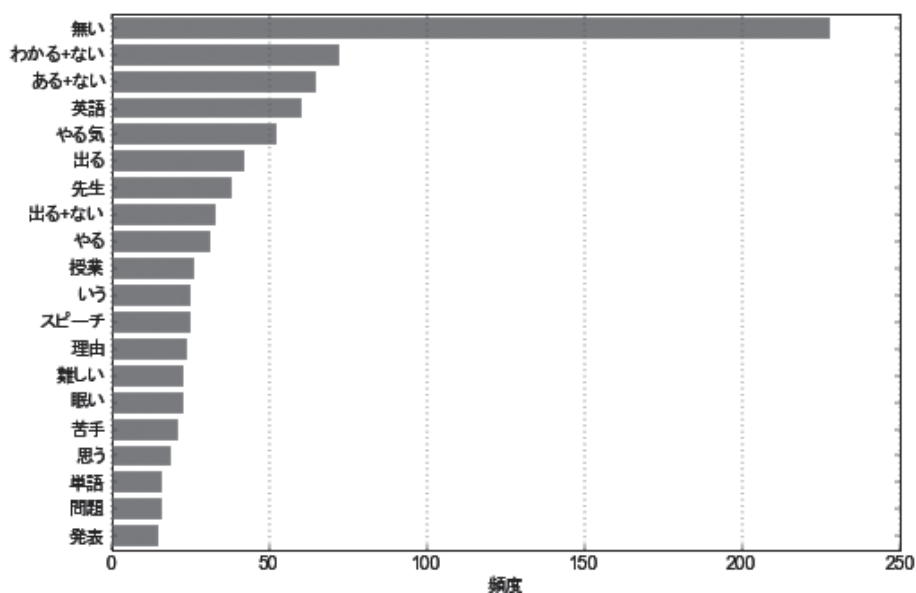


図 28 「英語の授業でやる気が出ないとき」の単語頻度解析の結果

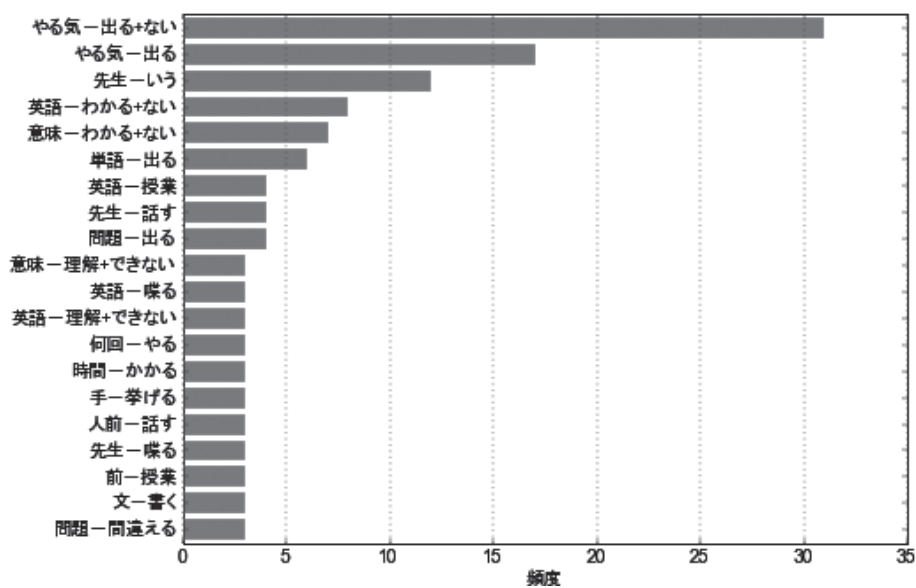


図 29 「英語の授業でやる気が出ないとき」の係り受け頻度解析の結果

小学校から中学校にかけて英語の授業に対する情意がどのように変化するか

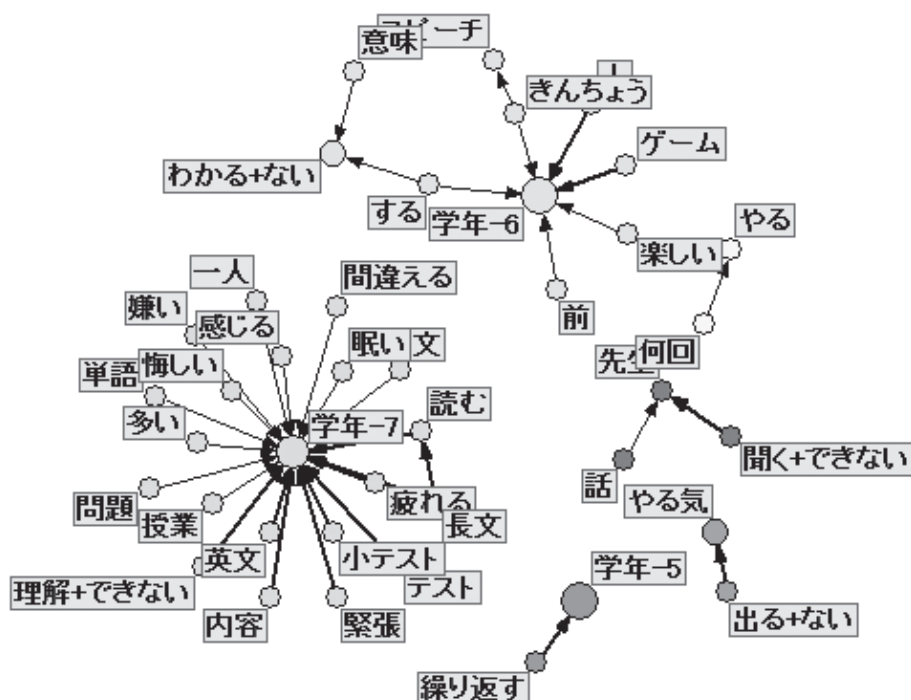


図 30 「英語の授業でやる気が出ないとき」のことはネットワーク分析の結果

各学年の分析

図 31 と図 32 は小学 5 年生の「英語の授業でやる気が出ないとき」の特徴語と特徴表現である。「無い」「ある＋ない」が特徴語として抽出されており、小学 5 年生は他の学年の生徒と比較すると、やる気が出ないということが少ないといえる。

図 33 と図 34 は小学 6 年生の「英語の授業でやる気が出ないとき」の特徴語と特徴表現で、「無い」「スピーチ」「発表」「きんちょう」が特徴語として、その他「手—挙げる」「英語—いう」「英語—苦手」「言葉—覚える」「人—話す」「前—出る」が、回答者は少数ではあるが、特徴表現として抽出されている。これらのことから、小学 6 年生はやる気が出ないときはあまりないが、一方で、手を挙げて言うことや人前に出て英語で話をするときにやる気が出なくなる生徒がいることがわかる。

図 35 と図 36 は中学 1 年生のやる気が出ないときの特徴語と特徴表現である。「授業」「わかる＋ない」「読む」「テスト」「問題」「先生」「理解＋できない」「眠い」「疲れる」「単語」「緊張」「長文」が特徴語として、「意味－理解＋できない」「時間－かかる」「問題－間違える」「単語－出る」「一人－発表」が特徴表現として抽出されている。これらのことから、中学 1 年生になると意味が分からない、授業が理解できないことや眠かったり、疲れていたりすることがやる気が出ない原因となっていることが推測できる。

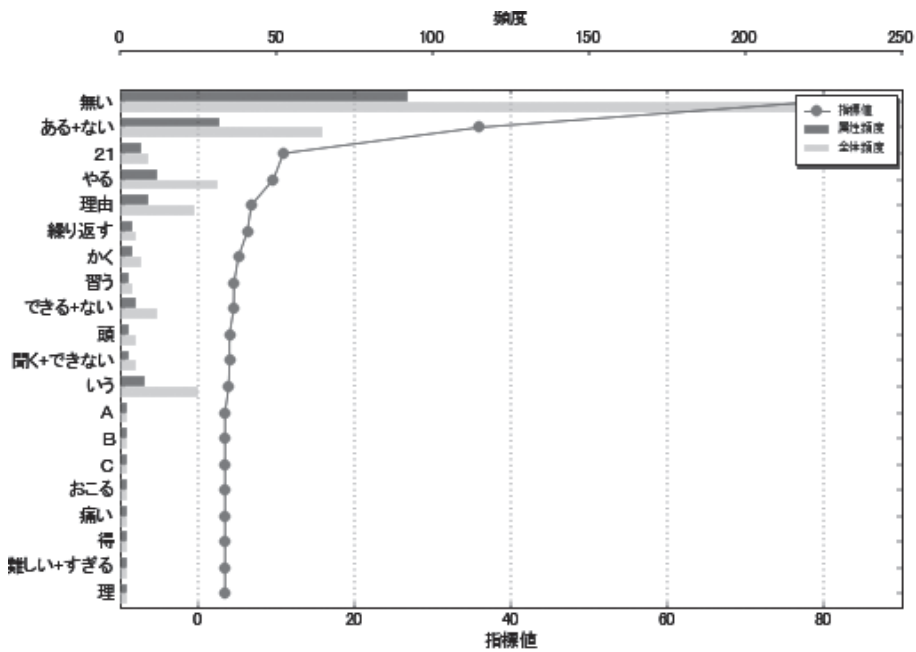


図31 小学5年生の「英語の授業でやる気が出ないとき」の特徴語分析の結果

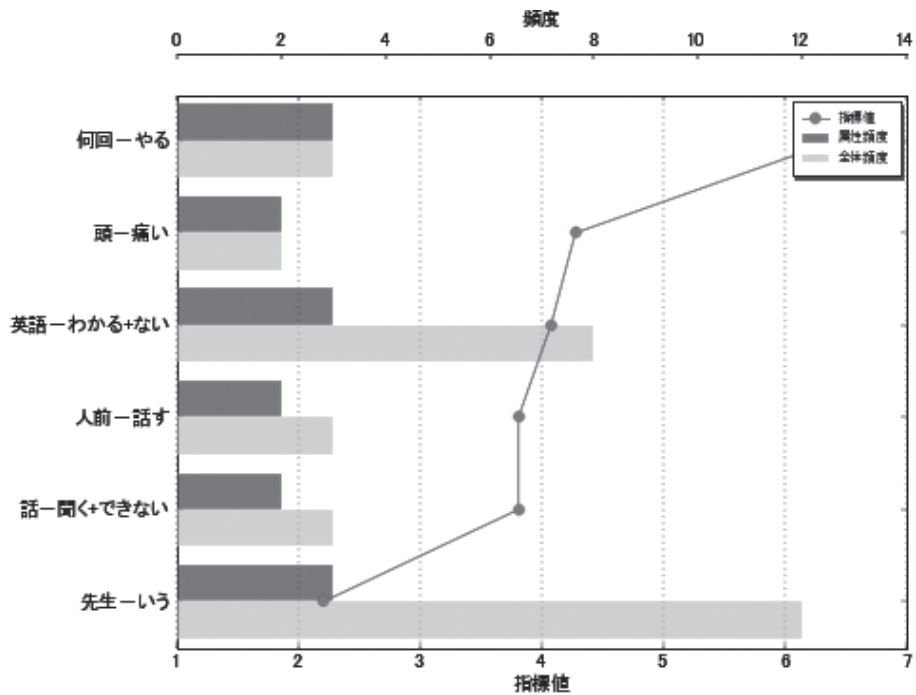


図32 小学5年生の「英語の授業でやる気が出ないとき」の特徴表現分析の結果

小学校から中学校にかけて英語の授業に対する情意がどのように変化するか

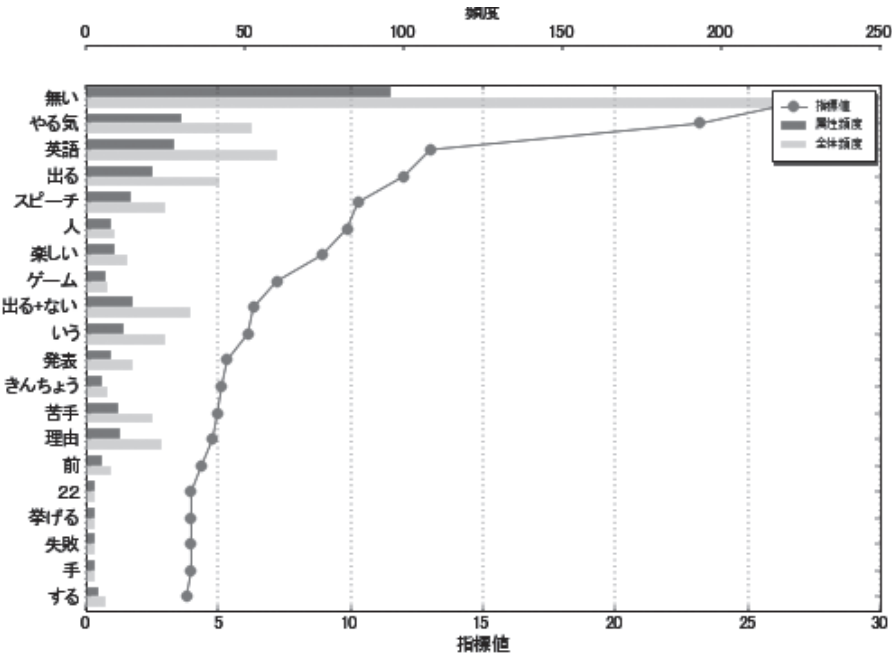


図 33 小学 6 年生の「英語の授業でやる気が出ないとき」の特徴語分析の結果

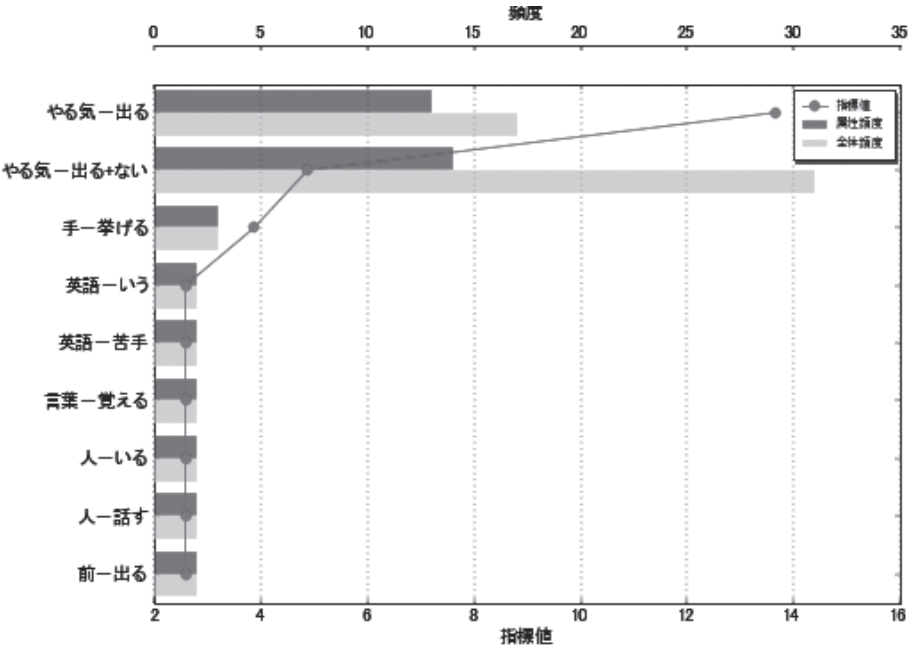


図 34 小学 6 年生の「英語の授業でやる気が出ないとき」の特徴表現分析の結果

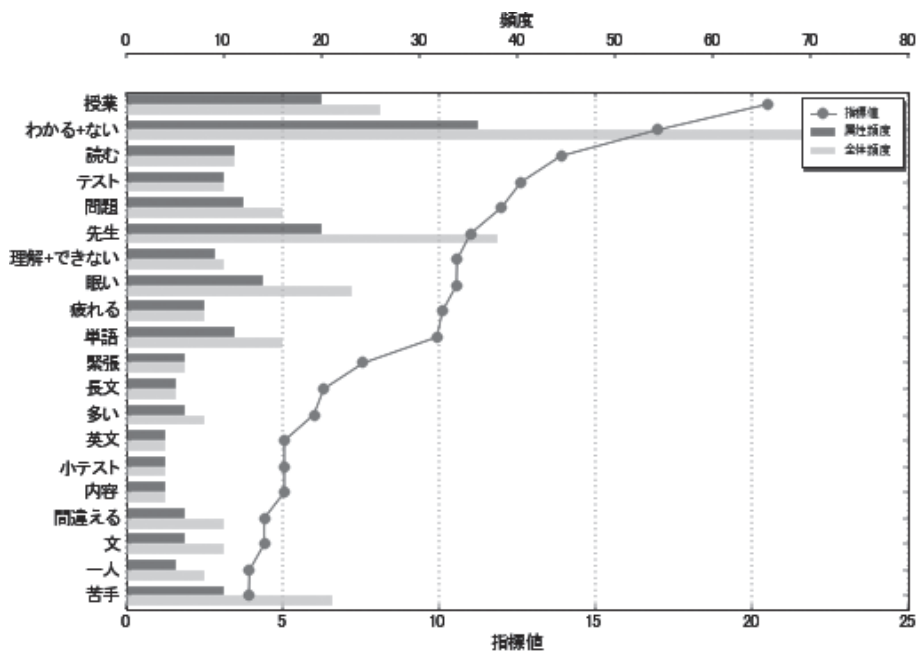


図 35 中学1年生の「英語の授業でやる気が出ないとき」の特徴語分析の結果

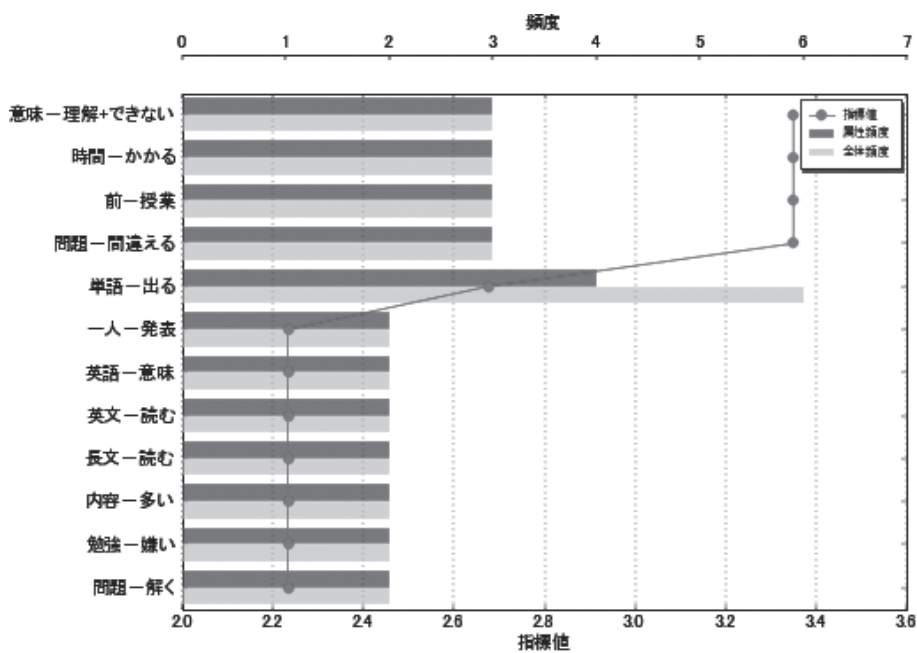


図 36 中学1年生の「英語の授業でやる気が出ないとき」の特徴表現分析の結果

小学校から中学校にかけて英語の授業に対する情意がどのように変化するか

考察

全体の考察

最初に、本研究に参加した生徒の全体的な傾向を考察する。「英語の授業で楽しいこと」の単語頻度解析と係り受け頻度解析の結果を見ると、「ゲーム」「ゲーム—学ぶ+できる」「ゲーム—やる」が上位に抽出されており、本研究に参加した生徒の多くがゲーム性のある活動を楽しんでいることがわかる。また、「英語の授業でやる気が出るとき」の単語頻度解析と係り受け頻度解析の結果においても「ゲーム」「ゲーム—やる」が上位に抽出されていた。これらのことから、本研究に参加した生徒にとってゲームが英語の授業への好的な態度を育む重要な要素となっているといえるであろう。

また、「英語の授業で楽しいこと」として「話す」「英語—話す+できる」「友達—話す」が単語頻度解析と係り受け頻度解析の上位に抽出されており、本研究に参加した生徒の多くが友達と英語を話すことを楽しいと思っていることがわかる。一方で、「英語の授業で嫌なこと」の単語頻度解析と係り受け頻度解析の結果では「英語—話す」「英語—発表」「英語—喋る+できない」「手—上げる」「人前—出る」「先生—あてる」「問題—あてる」が上位に抽出されており、さらに、「英語の授業でやる気が出ないとき」の単語頻度解析と係り受け頻度解析においても「発表」が上位に抽出されていた。以上のことから、英語を話すことが好きな生徒は多いが、当てられたり、人前に出て話したりすることは嫌だと感じている生徒が多いといえる。ゆえに、手をあげて発言させたり、指名して英語を発話させたりするよりも、英語を話すことが楽しいという気持ちを大切に、ゲームなどを通して、楽しく英語を話す機会を与え、生徒が積極的に英語を発話できる機会を与えていくべきであろう。

また、「英語の授業でやる気が出るとき」の単語頻度解析と係り受け頻度解析の結果には「先生—ほめる」「先生」が上位に抽出されていた。これらのことから、生徒のやる気を出すためには、先生の役割が重要であるということがわかる。

一方で、「英語の授業で嫌なこと」や「英語の授業でやる気が出ないとき」の単語頻度解析と係り受け頻度解析の結果に「わかる+ない」「英語—わかる+ない」「意味—わかる+ない」「発音—わかる+ない」「難しい」「苦手」が抽出されていたことから、多くの生徒が意味や発音がわからないときが嫌だと思い、さらに、わからないこと、難しいこと、苦手なことがやる気が出なくなることにつながっていると思われる。

学年別の考察

次に、各学年別に検討していく。

最初に、小学5年生の結果について考察していく。小学5年生の「英語の授業で楽しいこ

と」の特徴語と特徴表現として「ゲーム」「ゲーム—楽しい」「ゲーム—楽しむ」などゲームに関する語や表現が抽出されており、また、小学5年生の「英語の授業でやる気が出るとき」の特徴語と特徴表現としても「ゲーム」「ゲーム—やる」「ゲーム—勝つ」が抽出されていた。小学校のときに楽しかった外国語活動の調査を中学生に行ったカレイラ・齊藤(2016)や岡崎・西田(2013)においても、小学校の外国語活動でゲームが楽しかったと多くの生徒が回答しており、小学生、特に、小学5年生にとって、ゲームが英語の授業で最も重要な要素の一つになっていると思われる。また、やる気が出るときの特徴語として「シール」「勝つ」「ゲーム」、特徴表現として「シール—もらう・できる」「ゲーム—勝つ」が抽出されており、ゲームに勝つことやシールをもらうことが彼らのやる気を高める大きな要因となっているといえるであろう。

また、小学5年生の「英語の授業で嫌いなこと」や「英語の授業でやる気が出ないとき」の特徴語と特徴表現には「無い」「ある+ない」が上位に抽出されていたことから、小学5年生は英語の授業で嫌いなことややる気が出ないことがあまりないことがわかる。

次に、小学6年生の結果を考察していく。小学6年生の「英語の授業で楽しいこと」や「英語の授業でやる気の出るとき」として「友達」や「グループ」が抽出されており、小学6年生になると友達と共に学ぶことを楽しいと思うようになる生徒が増えてくる。これらのことから、小学6年生の英語の授業ではグループや友達と協力して行う協同学習などを多く取り入れていくべきであると示唆できるであろう。

また、小学6年生の「英語の授業で楽しいこと」として「わかる」「英語—わかる」「好き—わかる」など「わかる」ことが特徴語と特徴表現に抽出されていることから、小学6年生になるとわかることが楽しいと感じるようになる生徒が増えてくる。一方で、「英語の授業で嫌いなこと」の特徴語と特徴表現として「発音—わかる+ない」「英語—書く+できない」「理解+できない」が抽出されており、小学6年生になるとわからないことやできないことを嫌だと感じる生徒も増えてくる。ゆえに、小学6年生の英語の授業ではピクチャーカードや実物などを示すなど、わかりやすい授業になるような工夫を行うべきであろう(カレイラ, 2007)。

さらに、小学6年生の「英語の授業で楽しいこと」の特徴表現や「英語の授業でやる気が出るとき」のことはネットワーク分析や特徴表現では「英語—話す」「いろいろ—話す+できる」「スピーチ」「英語—喋る」「グループ—発表」が抽出されていた。これらのことから、小学6年生は英語を話すことが楽しく、それがやる気につながっているのがわかる。一方で、小学6年生の「英語の授業で嫌いなこと」や「英語の授業でやる気が出ないこと」の特徴語と特徴表現として「スピーチ」「いう」「発表」「きんちょう」「英語—いう」「一人—いう」「前—出る」「英語—発表」「発表—多い」「手—挙げる」「英語—いう」「人—話す」「前—出る」が抽出されている。つまり、小学6年生になると英語を話すことは楽しいが、

小学校から中学校にかけて英語の授業に対する情意がどのように変化するか

人前に出て話したり、手を挙げて発表したり、一人で英語を話すことは嫌いだと感じる生徒が多くなるといえる。以上のことから、小学6年生は英語を話すこと自体は楽しんでいるため、英語の発話のさせ方を工夫し、グループや友達と協力して行う協同学習やゲームなどを多く取り入れ、英語を話すことが楽しいと思う気持ちを大切にしながら授業を進めていくべきであろう。

最後に、中学1年生の結果を考察していく。中学1年生の「英語の授業で楽しいこと」の特徴語、特徴表現、およびことばネットワーク分析では「ペア」「ペア—やる」「ペア—できる」「ペア—練習」が抽出されており、中学1年生になるとペアワークなどが楽しいと思う生徒が増えてくることがわかる。

また、カレイラ・齊藤（2016）の結果と同様に、「歌」「歌—歌う」が中学1年生の「英語の授業で好きなこと」として抽出されていた。一方で、カレイラ・齊藤では中学1年生になると英文を読んだり書いたりすることを好きになる生徒が多くなると述べているが、本研究では「スピーチ」「話す」「英語—話す」「いろいろ—話す+できる」が中学1年生の「英語の授業で楽しいこと」として抽出されており、カレイラ・齊藤とはかなり異なる結果となっている。

さらに、「英語の授業で楽しいこと」として「ゲーム—学ぶ+できる」が特徴表現として抽出されており、中学1年生になると単に、ゲームが楽しいとか、ゲームで勝ったからではなく、ゲームで英語を学ぶことができるなど、ゲームに対する姿勢も変わってくるようである。

一方で、中学1年生の「英語の授業で嫌いなこと」の特徴語と特徴表現として「問題」「当てる」「当たる」「先生—当てる」「問題—当たる」が抽出されており、中学1年生になると先生に当てられるのを嫌だと思う生徒が増えてくる。

また、「英語の授業でやる気が出る時」のことばネットワーク分析の中学1年生のクラスや中学1年生の特徴語や特徴表現として「問題」「テスト」「わかる」「良い」「小テスト」「読む」「文」「解く」「達成感」「問題—解く+できる」「問題—解く」「テスト—良い」「文—読む」「テスト—出る」「内容—わかる」「文—読む+できる」「満点—とる+したい」が抽出された。これらのことから、問題が解けたとき、テストで良い点数が取れたとき、英文が読めたときなどに達成感を感じ、そのことがやる気につながっていることがわかる。一方で、「英語の授業でやる気が出ないこと」としても「小テスト」「テスト」「テスト」「問題」「理解+できない」「わかる+ない」が抽出されており、テストによりやる気が出る生徒もいれば、やる気が出なくなる生徒もいるといえる。つまり中学1年生になると、テストが良くも悪くも彼らのやる気に影響を与える大きな要因となっている。

以上のことをまとめると、小学5年生ではゲームが大きなウエイトを占めているが、小学6年生になると、単にゲームを楽しむという段階から、グループで行うことやわかることが

楽しいと思うようになってくる。また、小学6年生では英語を話すことが楽しいと感じる生徒が増えてくるが、人前で話したり、英語を発表したりすることはいやだと感じる生徒も多くなり、さらに、中学1年生になると先生に当てられることを嫌がる生徒が増えてくる。これらのことから、従来の生徒を当てて発表させるという授業形態よりもゲームやグループ活動など、英語を話すことが楽しいという気持ちを生かすような授業の組み立て方を行うべきであると示唆できる。

さらに、小学5・6年生のときには、「ゲーム」「グループ」など「英語の授業で好きなこと」と「英語の授業でやる気が出るとき」が重なるものが多い。しかし、中学1年生になると「英語の授業で好きなこと」は歌を歌うことやペアワークであるが、「英語の授業でやる気が出るとき」にはテストに関する記述が多くなり、好きなこととやる気が出る時が異なるようになる。また、中学1年生になるとテストが彼らの情意に大きな影響を与えていることが明らかになった。

おわりに

本研究では小学5年生、小学6年生、および中学1年生の英語の授業に対する気持ち（英語の授業で好きなこと・嫌いなこと・やる気が出る時・やる気が出ない時）がどのように変化するかを明らかにするために、自由記述式の質問紙調査を行い、テキストマイニングにより分析を行った。その結果、手をあげたり、先生に指名されたりして英語を話すことを嫌がる生徒が小学6年生や中学1年生になると増えてくるが、本研究に参加した生徒の多くは小学校から中学校にかけて継続して英語で話すことを楽しんでおり、特に、小学5年生はゲームを好み、小学6年生になるとグループ活動を、中学1年生になるとペアワークを楽しんでいることが明らかになった。

本研究は合計799名というかなり大人数の生徒の自由記述式の質的データをテキストマイニングにより量的データに変換して分析を行った研究であり、日本の小・中学生の英語学習に対する情意面を捉えるうえでも、研究の方法論としても英語教育の分野に貢献する研究であるといえる。しかし、いくつかの限界点がある。第一に、本研究は横断で小・中学生に調査を行ったが、生徒の変化をより正確に捉えるためには、縦断で彼らがどのように変化するかを調べる必要がある。第二に、2020年度から小学校で英語が教科化され、評価なども始まるため、小学生の段階で英語を読むこと、書くこと、さらに、テストに対する記述などがもっと増え、本研究結果と大きく異なる可能性もある。よって、今後も継続して同様の調査を行っていく必要があるであろう。

小学校から中学校にかけて英語の授業に対する情意がどのように変化するか

謝辞

本研究に協力してくださった国分寺市の小学校・中学校の先生方、生徒さんに心から感謝を申し上げます。なお、本稿は東京経済大学国外研究員（2017年度・研究テーマ「第二言語習得における Mixed Methods Research の研究」）の研究成果の一部である。

注

- 1) 属性 A を持つ文章または行において単語 B が出現する確率を（前提）属性 A と（結論）単語 B の信頼度とみなす（NTT データ数理システム, 2014）。

引用文献

- NTT データ数理システム（2014）「Text Mining Studio バージョン 5.0 マニュアル」『NTT データ数理システム』
- 岡崎浩幸・西田幸江（2013）「中学 1 年生から見た小学校外国語活動」『富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究』（7）, 47-55.
- カレイラ松崎順子・齊藤涼子（2016）「中学 1 年生を対象にした小学校の外国語活動と中学校の英語の授業に対する意識調査—テキストマイニングの手法を取り入れて—」『言語研究と量的アプローチ』石川有香・石川慎一郎他編, pp. 32-44 東京：金星堂.
- カレイラ松崎順子（2007）「『スーパーえいごリアン』を使用した児童英語講師養成講座における実践報告」『JASTEC Journal』（26）, 61-76.
- 宋美蘭・水野君平・侯月江・濤岡優・加藤弘通（2019）「札幌市の子どもたちにおける『外国語』及び『総合的な学習』に関する実態分析」『子ども発達臨床研究』（13）, 11-22.
- 直山木綿子（2011）「外国語教育における小中連携」『小中連携 Q&A と実践 小学校外国語活動と中学校英語をつなぐ 40 のヒント』萬屋隆一・直山木綿子他編, pp. 6-7 東京：開隆堂.
- 賛育子・三宅絢花（2014）「母性看護学実習に対する女子学生の実習前のイメージ、実習中感じたこと、実習後の思い—テキストマイニングによる分析—」『ヒューマンケア研究学会誌』（5）, 21-28.
- 萬谷隆一・志村昭暢・中村香恵子・宮下隼（2013）「小学校外国語活動の成果に対する中学校英語教師の意識調査」『小学校英語教育学会学会誌』（13）, 134-149.
- Dörnyei, Z. (2003). *Questionnaires in second language research: Construction, administration and processing*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.